

### 杉本章子の作品における江戸社会の様相： 「信太郎人情始末帖」シリーズを中心に

LI, Shaonan / 李, 紹楠

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 / 国際日本学論叢

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

22

(終了ページ / End Page)

42

(発行年 / Year)

2017-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013779>

# 杉本章子の作品における江戸社会の様相 —「信太郎人情始末帖」シリーズを中心に—

李 紹楠

## はじめに

杉本章子(1953-2015)は女性の時代小説作家の中で、広く注目されている一人である。1979年に作家としてデビューし、歴史・時代小説を専門に書き続けた。歴史考証をもとに江戸時代の風俗を細かく表現することに定評があり、直木賞を含めて多数の文学賞も受賞した。しかし、その成果がある一方、彼女の作品に関する研究はまだ少ない。厳密な歴史背景考証のほか、作品内容の詳細について分析し、論じるべき課題は少なくない。そこで、筆者は彼女の作品を研究対象として取り上げる。

本稿で扱う「信太郎人情始末帖」シリーズは、杉本章子の初めての連作作品であり、唯一の完成したシリーズである。この作品において、庶民から旗本まで、様々な人々が登場し、江戸の社会の様子が繊細に表現されている。杉本の作品群の中でも、このシリーズに描かれている江戸の町の様相はほかの作品より詳細である。本稿は、「信太郎人情始末帖」シリーズを対象として、杉本章子の作品における江戸社会の表象を分析し、その特徴を解明するものである。

## 1. 作家の紹介

ここで、まず杉本章子の創作活動を振り返ってみよう。

杉本章子は1979年に短編小説「男の軌跡」<sup>1</sup>を歴史文学賞に投稿し、佳作に入選してデビューを果たした。この作品は、江戸時代の儒学者寺門静軒を主人公として、彼の著作『江戸繁昌記』に基づいて書いたものである。『江戸繁昌記』は、寺門静軒が天保三（1832）年から天保七（1836）年にかけて、当時の江戸の町を風刺的な口調で記述した漢文の戯作だ。杉本章子がこのテーマを選んだ理由の一つは、大学院時代に『江戸繁昌記』を研究してきたからである<sup>2</sup>。その時、彼女が出した論文は「寺門静軒の無用者意識とその思想」という<sup>3</sup>。その中で、静軒が抱いていた無用者の認識は社会に対する喪失感から生じたものと論じ、「無用者意識は、『有用』の世界への願望の裏返しではないだろうか」<sup>4</sup>と指摘している。このような視座は彼女のデビュー作「男の軌跡」にも反映している。小説は寺門静軒が仕官の道で挫折したところから始まった。権力者に翻弄され、武士である兄の散漫さを嫌悪し、彼はついに仕官を諦めた。そこから生じた強い喪失感と、社会を革新したいという衝動が静軒を悩ませる。杉本は、よくいわれている江戸人の粋の造形より、挫折と苦悩を背負う人物像を選んだのだった。

この小説は杉本章子にとって、作家としての原点であり、作品の基調を決めた作品でもある。その後にかかれた多数の作品はこのデビュー作のコンセプトに影響されている。その作品群を概観すると、近世の、特に天保

<sup>1</sup> 杉本章子（1980）「男の軌跡」『歴史読本』新人物往来社、第25巻第5号

<sup>2</sup> 「特別インタビュー 第百回直木賞受賞 杉本章子」『歴史読本』新人物往来社、第34巻第7号、p162-163

<sup>3</sup> 杉本章子（1978）「寺門静軒の無用者意識とその思想」『金城国文』金城学院大学国文学会、第54号、2月、p54-62

<sup>4</sup> 杉本章子（1978）「寺門静軒の無用者意識とその思想」『金城同文』金城学院大学国文学会、第54号、2月、p62

(1830-1844) 以後の江戸が、彼女の最も好んだ歴史舞台であることがわかる。それに、作品の主人公は有名な歴史上の人物であっても架空の人物であっても、寺門静軒のように苦境に陥った人物像が多い。

例として、1982年に発表された「写楽まぼろし」があげられる。この作品は1982年の1月から12月まで『歴史読本』に掲載されており、杉本の最初の連載作品である。小説の舞台は寛政(1789-1801)年間の江戸であり、版元・蔦屋重三郎と浮世絵師・東洲斎写楽が実は親子であるという想像に基づいて描かれている。父親を探している蔦屋重三郎は養父に対していつも嫌悪感を抱いている。そのため、家業の引手茶屋を継ぐことを拒否し続けていた。自分の居場所に違和感を持っている蔦屋重三郎は、まさに「男の軌跡」と同じように、苦悶を抱きながら生きている人物像である。

「写楽まぼろし」はのちに第89回(1983年上半期)の直木賞候補作になったが、受賞できなかった。その後、杉本はいくつかの短編小説や随筆を発表し、1987年に「東京新大橋雨中図」を発表した。この作品がついに第100回(1988年下半期)の直木賞を獲得した。作品の主人公は幕末の浮世絵師・小林清親である。彼の人生に映し出された幕末から明治へ変化する社会の様相が小説の主題となっている。

90年代に入ると、杉本は落語家・三遊亭可楽を主人公とした小説『爆弾可楽』(1990)や、江戸芸者から幕府のスパイになった女性を描く『間諜 洋妾おむら』(1997)などの作品を発表した。また、新しい挑戦として、杉本は朝日新聞で一年間をかけて「残映」(1995)という明治時代を背景とする小説を連載した。

さて、ここまでの経歴では、杉本章子はいくつかの長編を発表していたが、数は少なかった。特に、歴史・時代小説の中でよく扱われるシリーズ形式の作品はまだなかった。この後、1999年、杉本は文芸誌『オール読物』の1月号において「おすず」という短編小説を発表し、これはのちの「信太

郎人情始末帖」の第一回になった。もともとこの作品はシリーズになる予定がなかったという。『オール読物』2001年11月号のインタビューで、杉本は発表した当初は長編作品として書いたものではなく、出版社から短編連載の依頼を受けていたものだと述べている。「思いがけず連作となったいま……主人公の信太郎と二人三脚で回を重ねていきたい」とも話している。「二人三脚」という言葉から、このシリーズは杉本にとって挑戦であった一方、深い思い入れがあることが読み取れる。連載は2008年まで10年間続いており、36回にわたって同誌に掲載された。2015年に杉本章子が死去し、この作品は彼女が唯一完成させた、文章量が最も長い小説になった。作品には、身分と職業が異なっている様々な江戸の人々が登場し、豊富な人物像が表されている。その上、物語の展開とともに、江戸の町の風景も幅広く描かれている。分量があるものの、杉本がデビューから描き続けていた江戸の様子は、このシリーズでより全面的に表されている。そのため、本稿は「信太郎人情始末帖」シリーズを研究対象にすることにした。

## 2. 作品の紹介

この節では「信太郎人情始末帖」シリーズの内容について紹介する。小説の舞台は嘉永年間(1848-1854年)の江戸に設定された。主人公である信太郎は、もともと江戸の呉服太物屋・美濃屋の長男であった。彼はいずれ結婚して家業を継ぐことになっていたが、ある日吉原の引手茶屋・千歳屋の女主人おぬいに一目惚れした。結局、許嫁と絶縁した上に、親からも勘当された。ただし、番所に届けを出さなかったため、正式な勘当にはなっていない。それは、両親が信太郎はいつかおぬいと別れて美濃屋に戻ることを期待していたためである。家族と複雑な関係になった信太郎は家を出て、芝居小屋の一つである河原崎座で働くようになった。一方、信太

郎の恋人おぬいは、自分が二歳年上で、しかも子供を持っていることに劣等感を抱き、信太郎との関係がいつか終わるのだろうと思っていた。彼らのほか、岡引きの手下になった信太郎の幼馴染の元吉や、芝居小屋の囃子方を務める御家人崩れの貞五郎など、個性豊かな脇役が活躍している。彼らの周辺に起こった様々な事件と、登場人物の間の人情話を加え、ストーリーが徐々に展開していく。

杉本章子の作品研究にあたって、まず注目すべきところは歴史考証へのこだわりである。「信太郎人情始末帖」シリーズの場合、キャラクターの多くは架空の人物であるが、彼らが巻き込まれた事件の多数は史料をもとに描かれている。たとえば、シリーズの第一回「おすず」で描かれている強盗事件について、杉本は「南の町与力佐久間長敬の嘉永日記抄から拾った事実譚である」<sup>5</sup>と述べている。「嘉永日記抄」によると、嘉永三年から四年まで、「江戸市中強盗の被害多く町奉行所に訴出るもの」、「此賊の内に七人組のものありて其害尤多く」と記している。この七人組は、「京都無宿京都入墨藤吉」と呼ばれる男を頭とし、その中で「御老中松平伊賀守殿の厩中間」を勤めているものもいた。その方便で、「夜に入れば主人方の弓張り提灯をひそかに持出して主人の使に出たる躰を装ひ」、「逢ひし者誰一人これを怪まざりし也」とある<sup>6</sup>。この記述をもととして作った「おすず」は、架空の事件関係者を主人公としているが、嘉永年間という歴史背景を忠実に描いており、事件の終始も記述のとおり構成されている。また、作者は江戸時代のリアリティを細かく表現するために、登場人物の外見から言葉遣いまで工夫している。文庫本『おすず 信太郎人情始末帖』の解説において、文芸評論家の細谷正充は、「『浮世ござ』『忌中島田』『ずんべらぼう』『目申』……数えきれないほど、江戸を感じさせる言葉がちりばめられている」

<sup>5</sup> 日本文藝家協会(2000)『代表作時代小説(平成12年度)』光風社、p7

<sup>6</sup> 大久保利謙編(1981)『嘉永日記抄』『江戸 第六巻 日記・紀行編』立体社、p95

と称賛している<sup>7</sup>。

とはいえ、時代小説を執筆することは歴史記録を再現するだけの作業ではない。作者が想像で史料の空白を補完することも必要である。そこから独自の世界観が表現される。このシリーズにおいて、主人公を含め、架空の登場人物たちはまさに作者の江戸に対する見方を表している。90年代までの歴史・時代小説において、町人の生活を中心として描く作品はまだ少なかった。特に幕末期を題材とした作品の場合は、武士を主人公とした作品のほうが圧倒的に多い。その中で、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』(1962-1966)や、藤沢周平の『たそがれ清兵衛』(1988)など、大きな人気を得た名作があげられる。幕末時代の日本は、外交上で開国を迫られた一方、国内で各藩の勢力も強まり、幕府の権力が揺らいでいた。不安定な権力層は歴史・時代小説の作者たちにとって様々な視点から語り得る素材になる。しかし、「信太郎人情始末帖」シリーズは町人の視点を選んだ。多くの町人の物語を描いてきた杉本章子にとって、この選択肢は彼女の得意分野といえる。まださほど注目されていなかった町人の視点から、新しい江戸の様子も描き出せる。また、「信太郎人情始末帖」シリーズは捕物帳という形で展開していくが、ほかの捕物帳でよく見られる痛快さを求めている。主人公は役人ではなく、悪人を裁くこともできない。これから論じていくように、ストーリーの中心は犯罪事件の解決ではなく、事件にかかわった人々の思いになっている。シリーズの主題は、信太郎とほかの登場人物が体験した様々な感情の記録であることが読み取れる。表題に「人情始末帖」というフレーズを用いたのは、その主題を示すためであろう。作品に描かれている人間関係の様子は、杉本の人情という言葉に対する解釈を反映していると考えられる。

---

<sup>7</sup> 杉本章子(2003)『おすず 信太郎人情始末帖』文藝春秋、p283。本文と解説の引用は、文庫本『信太郎人情始末帖』シリーズ(2003-2011)を参照している。

つまり、「信太郎人情始末帖」シリーズにおける近世江戸の表象を解明するには、二つのポイントがある。一つは、歴史考証によって組み立てられた舞台背景としての江戸の町の様相だ。もう一つは、作者が描いている江戸の人情の様相である。リアリティがある社会環境の造形が存在するからこそ、登場人物の感情表現が自然になり、共感できるものになる。また、登場人物の感情の動きとともに、物語の舞台も広がり、背景である町の様子も読者の前に徐々に拡大していく。二つのポイントは相互に影響し、より全面的な江戸の様相を表している。本稿では、主に舞台背景としての江戸社会の様相について論じていく。

### 3. 社会の様相

「信太郎人情始末帖」シリーズの舞台は、嘉永四（1851）年から安政三（1856）年までの江戸である。その中で、特に町人の生活を中心としていることはすでに述べた。前述したように、杉本章子の作品において、綿密な歴史考証は一つの重要な特徴である。当然ながら、「信太郎人情始末帖」シリーズに表現されている江戸の様相も例外ではない。さて、実際の幕末期において江戸の町人たちはどのように生活していたのか。最初に歴史資料に見られる近世江戸の様子について説明する。

徳川幕府の成立とともに、江戸は政治の中心地になり、同時に数百からものちには千数百に及ぶ町を基礎組織として抱え、京都や大坂とともに三都と称される中でも、とりわけの規模を持つ巨大都市へと発展していく<sup>8</sup>。人口から見ると、徳川時代後期の江戸は50万を超えるほどの町人人口があったと推定されている<sup>9</sup>。武家人口の史料は詳細がないため、江戸の総人口を

<sup>8</sup> 吉田伸之（2012）『伝統都市・江戸』東京大学出版会、p78-79

<sup>9</sup> 鬼頭宏（1989）「江戸＝東京の人口発展：明治維新の前と後」『上智経済論集』上智大学経済学会、第34巻第1、2号合併号、3月、p49



明瞭に把握することは困難だが、最も膨張した天保(1830-1844)頃は130万を上回ったと推算されている<sup>10</sup>。人口の急速な成長とともに、江戸地域における消費の需要も拡大し、江戸の商品経済が著しく発展した。享保六(1721)年、商人・職人組合の結成令が施行された。この結成令は、当時の江戸市場の中核を占める市場仲間や大店などの有力な商人層が、都市内部の社会的権力として事実上認知されたことを示すものといえる<sup>11</sup>。また、比較的平和な時代を迎えた江戸社会は、文化の発展に適切な環境を提供した。商品売買を主とする狭義の商業以外、芝居小屋や吉原などの娯楽産業も同様に繁盛していた。

江戸は開幕以来、繁栄を続けたが、天明の大飢饉(1782-1788)と天保の大飢饉(1833-1836)が江戸社会に大きな打撃を与えた。飢饉は物価の高騰を引き起こし、大きな経済問題になった。物価騰貴の原因に対して、十組問屋などの株仲間の不正な価額つり上げと判断する老中と勘定奉行は、天保十二(1841)年に株仲間解散令を出した<sup>12</sup>。この解散令によって、物価は一時下がったものの、商品の流通を混乱させたため、物流の中心である江戸の市場に混乱をもたらした。結局、幕府は嘉永四(1851)年に株仲間の再興を図ったが、江戸の経済状況はそのあとも不安定なままであった。その上、国内では農村地域で一揆が多く発生し、外交においてペリー来航などの問題もあった。さらに、文化の面において、文政年間を過ぎる頃から頹廢的な気分が世に充満して、享樂的な面が強く押し出され、官能的・刺激的な趣味生活が営まれていった<sup>13</sup>。経済、文化、政治などの面で生じた悪化は都市部の生活にも影響している。近世末期の江戸社会は、全盛期の安定と異なって実に衰える一方であった。

<sup>10</sup> 小木新造(1979)『東京庶民生活史研究』日本放送出版協会、p54

<sup>11</sup> 吉田伸之(2009)『成熟する江戸』(講談社学術文庫1917)講談社、p21

<sup>12</sup> 藤田覚(1989)『天保の改革』吉川弘文館、p83

<sup>13</sup> 河竹繁俊(1987)『河竹黙阿弥』吉川弘文館、p10-11

「信太郎人情始末帖」シリーズの文庫本第四巻『火喰鳥 信太郎人情始末帖』の解説に、作家村田喜代子は杉本章子との会話を記している。杉本は、「近世の都市の暮らしが好きなの。そういう所で生きる人たちの声だとか、足音だとか、空気だとか、そういうのにじっと耳を傾けていたいよね」<sup>14</sup>と述懐している。この言葉から、彼女の歴史考証に対するこだわりも窺えるだろう。それに基づいて作り上げた社会環境の描写は、ほかの解説においてもたびたび評価されている。たとえば、大衆文学の評論家である清原康正は、「信太郎がつとめる芝居小屋の内幕を通して描き出される江戸期の芝居の世界、美しい江戸ことばで描かれる人情と生きていくことの哀感などに独特のリアリティがあるのも、こうしたリアリティの追求という確固たる姿勢によるものといってよいだろう」<sup>15</sup>と評価している。

さて、この作品において、リアリティがあるとされる江戸社会の様相は一体どのように表現されているのか。以下では、二つの項目に分けて分析する。

### 3.1. 登場人物の目に映す江戸像

この節では、作者が江戸のリアリティを表現するための描き方を分析する。最初に、清原の評論で言及した重要な舞台背景の一つ——芝居小屋・河原崎座に関する描写を例として考察する。

作品の主人公・信太郎は、もともと呉服太物屋・美濃屋の跡継ぎ息子であったが勘当されたため、河原崎座の大札<sup>16</sup>のところで働くようになった。その大札を務めている男は久右衛門といい、実は信太郎の恋人・おぬいの伯父でもある。このように、芝居小屋・河原崎座は、信太郎の職場である

<sup>14</sup> 杉本章子(2009)『火喰鳥 信太郎人情始末帖』文藝春秋、p300

<sup>15</sup> 杉本章子(2004)『水雷屯 信太郎人情始末帖』文藝春秋、p304

<sup>16</sup> 江戸時代の劇場で、興行の会計、出納のすべてをつかさどる責任者の称。大勘定。(本稿に使う単語の説明は『日本国語大辞典』を引用している。)

だけではなく、彼の恋人の親族関係とも繋がっている。そのため、河原崎座はストーリーの中で、特に前半において非常に重要な場所である。連載の第一回「おすず」の冒頭に、信太郎が登場したシーンも河原崎座を背景にしている。

第一回の中で、二十四歳の信太郎は勘当されてから二年が経ち、大札部屋で「早出や夜仕事をした裏方に払う割増金の算盤をはじいていたところ」であった。その時、彼の幼馴染・元吉が訪ねてきた。元吉は、「おすずさんがどうしても信ちゃんに会いたい」と信太郎に伝える。おすずという女性は、もともと信太郎の許嫁だった。信太郎が引手茶屋の女主人・おぬいと恋に落ちてから、二人は二年前に縁を切った。信太郎が勘当されたのもそのためである。おすずに「顔向けがならない」と思っている信太郎は、「うまく断ってくれよ」と「暗い声で」元吉に言った。それでも元吉が説得し続けて、信太郎はようやく同意した。この部分は、信太郎の人物像を表現する上で、信太郎とおすずの関係性を解明するところである。彼はおすずに対して強い罪悪感を抱いており、会うことを避けている。過ちに追いつめられた主人公の造形は、まさに前述した杉本の得意な苦境に陥った主人公像である。

歴史上の河原崎座は、江戸三座といわれている歌舞伎劇場・森田座の控え櫓<sup>17</sup>である。江戸時代の歌舞伎は、大衆の娯楽として絶大な人気を集めており、芝居小屋の豪華さと賑やかさは容易に想像できるだろう。ところが、この場面において作者は河原崎座という背景を異なる視点で描いている。信太郎のうろたえる気持ちを映すように、作者は彼を河原崎座の裏側、楽屋に登場させた。それに、劇場は「二十日足らずで、顔見世の初日の幕があく」時期で、「舞台裏手からは、道具立てに追われる大道具方の声に

<sup>17</sup> 江戸時代、中村・市村・森田の江戸三座で休業するところがあった場合、その代わりに興行を許された都・桐・河原崎の三座のこと。中村座は都座、市村座は桐座、森田座は河原崎座がそれぞれ代わることに定まっていた。(引用)

混じって、木槌や金槌の音がきりなしに響いてくる」。騒音がかまびすしい劇場の楽屋口で、忙しい「芝居者の出入り」をそばに、信太郎と元吉が会話をしている。また、彼らの前に狂言作者部屋の利助が通った時、信太郎は作者部屋の人々について、「放蕩者(のら<sup>18</sup>)のごみ場とも言われているが、たしかに御家人くずれであり、元坊主あり、信太郎のような勘当者ありの、雑多な人間の吹きだまり」と、辛辣な評価を抱く。

言うまでもなく、幕開け間際の芝居小屋の騒がしい様子は、河原崎座で働いている内部の者しか見られない一面である。信太郎は大札の下で働くことで、芝居小屋の内部の人間になり、劇場の表の賑やかさより裏側を多く見ている。また、彼が作者部屋の人を見るとすぐに「雑多な人間の吹きだまり」という形容を思い出すことが示すように、いわば芝居小屋の陰の一面も知っている。むしろ、作者が最初から芝居小屋の裏側を舞台として描くだけに、信太郎が見ている裏の風景こそ、この小説の中にある芝居小屋の常識になっている。清原が指摘した「芝居小屋の内幕を通して描き出される江戸期の芝居の世界」というのは、まさにこのような描き方を指しているであろう。

もう一つの例をあげると、河原崎座で上演された演目の当たりと外れも、信太郎の視点を通じて、裏側にいる人間の認識で表現している。彼は大札の下で働いているため、芝居小屋の繁盛は常に劇場の収入増減で反映している。たとえば、連載の第四回「黒札の女」には、河原崎座で上演した『勧進帳』が大評判になり、劇場は「千金を得てほくほくした」という。また、第六回「水雷屯」に、河原崎座で上演された『しらぬい譚(ものがたり)』の続き狂言は、「中村座がぶつけてきた『与話情浮名横櫛』の後日狂言に客を奪われてしまい、当たり振る舞いのそばが配られることもなかった」。それでも、「入りが薄くて頭を悩ますのは、座の頭立った者の役目」で

---

<sup>18</sup> 引用文の () は、原作による振り仮名である。以下同様。

あって、「下っ端では早くも、打ちあげに一杯やる相談」をしていた。信太郎も囃し方を勤めている友人・貞五郎に声をかけている。

さらに、信太郎の身分の変化によって、河原崎座も異なる様相を呈している。物語の後半に入ると、信太郎は父の卯兵衛が亡くなったため、悲しみの中で実家の美濃屋を継ぐことを決心した。芝居小屋の仕事も辞めるしかなかった。この展開の中で、彼の目に映る河原崎座の風景も変わった。第二十一回「火喰鳥」の冒頭では、信太郎は太物呉服屋・美濃屋の長男として、再び河原崎座にやってきた。父の忌が明けたことを機に、河原崎座の友人たちにお別れを告げるためである。この時、すでに内部の者ではなくなった信太郎は、河原崎座の前に立ち、珍しく劇場の様子を正面から眺めている。

河原崎座の大屋根にあがる櫓を見あげていた信太郎は、暮れのこる西の空に目をやった。雲が墨流しのように広がっている。こよいはどうかやら、霜夜になるらしい。

櫓下の腕木にさがる大提灯には早くも灯が入っていて、櫓幕の組み角に二つ巴の座紋が薄暮のなかに浮かび出ている。

……

将軍家(おかみ)を騒がせた源氏坊天日と名のる僧を召し捕る場で、大立ち回りを盛り上げる早い渡り拍子と、屋鳴りのするような喝采が、木戸の前にたたずむ信太郎の耳に届いた。

いつも舞台裏で芝居の音を聞いていた信太郎は、この時はじめて劇場の外でその賑やかさを認識した。裏側でよく見た騒がしい様子と異なって、表側では音楽と喝采が溢れている。信太郎はこの立派な正面を眺めてから、河原崎座と別れを告げた。この賑やかな劇場風景から、信太郎の河原

崎座に対する未練と愛着がよくわかる。

このように、作品に描かれている江戸の様子は、常に人物の目線に従って展開している。登場人物が舞台背景における立ち位置が変化する時に、読者に伝わる江戸の様子も異なる。作者は、単に正しい歴史を再現することより、人物の設定にふさわしい江戸像を作ることを目指しているといえる。

さらに、視点の転換だけではなく、あえて別れのシーンに夕方の河原崎座を舞台にすることから、町の描写が人物の心境と繋がっている傾向が明らかである。従来、文学作品の中で、舞台背景を通じて感情を表すことが多くある。この作品において、町の風景は特に重要なツールになっている。作者が常に簡潔な叙述を使い、人物の心境を長く描かない。しかし、読者は人物の目に映している風景から、彼らの感情をはっきり読み取ることができる。前文に引用したシーンの中で、作者は「暮れのこる西の空」を背景にし、その上、「霜夜になるらしい」という文も加えた。父を失い、友人とも離れるようになった信太郎の喪失感が、この黄昏と冬夜の雰囲気を通じてなお鮮明に表されている。

ほかに、信太郎の住居、浅草今戸町にある長屋・万平店に関する描写も一例である。第一回で、信太郎はおすずと会うことを承諾し、自分の家で面会するようになった。二人が縁を切った頃、おすずはまだ十六歳だが、今は十八歳の美しい女性に成長した。「海老染の地に、刺繍(ぬい)の小菊を散らした振り袖姿」で、「信太郎の目にまぶしいほど大人びて映った」。ところが、おすずはすでに新しい婚約を結んだものの、信太郎に「一度だけ……お嫁さんにしてください」と泣きながら願い出る。思いがけない言葉に対して、信太郎は「膝を正して」、「おれ、なんにも聞こえなかったぜ」と「きっぱりと言った」。さらに、その拒絶は自分の恋人を思うためではない。信太郎はおすずに、「このうえ肩身のせまい思いをさせたくない」、「きれいな体で嫁入りして」ほしいと告げた。この言葉はおすずにとって、か

つて婚約を破った信太郎が再び自分の存在を拒絶したという意味である。また、信太郎にとっては、道徳的に正しい選択をした一方、おすずを二度も裏切ることになった。すでに勘当され、人間関係の葛藤の中にいる信太郎は、おすずとの面会でさらに深い罪悪感を抱くようになる。このようなシーンにおいて、作者は彼らを貧寒の長屋・万平店に置いた。おすずの前に現れたのは、「粗壁ぎわに行李と茶箆筥、片側に夜具を囲った枕屏風と行灯があるだけの寒々しい六畳一間」の空間である。長屋に関する描写はこの一文しかないが、それでも、素朴な部屋は信太郎の窮迫した心境を明白に反映している。また、美しいおすずの姿とも強烈な対比になり、隔たりが大きな二人はもう復縁できないと暗示している。この描き方から、江戸という存在は単なる客観的な背景ではなく、人物の感情の一部になっている。町の風景は、常に登場人物の立場や心境と同調しているからこそ、そのリアリティが一層増していると考えられる。

ただし、人物の主観的な視点に徹すると、江戸の町に関する情報量もかなり制限されるようになる。この問題を解決するために、作者は多視点の方法を用いた。主人公の信太郎以外、恋人のおぬいやおぬいの息子・千代太などを視点の主とした部分もある。視点の転換によって、一つの視点で描き切れない部分が補完できる。その代表的な部分は、安政の大地震を描いている第三十回「その日」である。この回では、十一人の視点が集中的に描かれている。信太郎、おぬい、千代太など主要人物のほか、御家人の貞五郎、芸者の小つな、同心の中山弥一郎などの人物も視点の主になっている。このように、地震当日の全貌を大人と子供、男性と女性、役人と町人など、異なる身分の人々を通じて描き出している。

以上の分析から見ると、作品は三人称を使いながらも、一人称の小説と同じように、常に登場人物たちの目線を基準としている。その上、登場人物たちの感情表現が、舞台背景の細部まで塗り込められている。この描き方によって、読者は人物と同じ立場で江戸を眺めながら、彼らの心境まで感じられる。

従って、江戸という空間の臨場感を一層強く表すことができる。これは多くの解説で評価されたリアリティが生じた要因の一つとして考えられる。

### 3.2. 全体性を持つ江戸像

前節で、筆者は江戸のリアリティを表現する方法について分析した。作者は、登場人物の立場や感情に沿って町の様子を描いており、読者に江戸という空間のリアリティを感じさせる。当然ながら、この描き方は簡単に実現出来ることではない。作者の緻密な歴史考証があってこそ成功したものである。

前述のとおり、作者は重大な事件はもちろん、江戸市中の地理や風俗なども嘉永・安政年間の史料に基づいて描いている。ふたたび河原崎座を例にあげれば、小説の中に見える河原崎座の演目は、すべて史料に記載されている年代のとおり用いられている。『歌舞伎年表』によって、『勧進帳』は「古今の大当たり」<sup>19</sup>の演目であることがわかるが、小説の中も河原崎座は「千金を得てほくほくした」とされるのである。また、嘉永四(1851)年から始まった連載第一回に、「来る閏二月朔日から『妹背山婦女庭訓』をかける」という文がある。これも『歌舞伎年表』にある嘉永五(1852)年の「閏二月朔日より、河原崎座、『妹背山婦女庭訓』」と記述されているとおりである。

また、作中の江戸言葉は歴史考証の細かさを最も直接に反映している。前文にも引用したが、文芸評論家の細谷正充は、作品の中で「数えきれないほど、江戸を感じさせる言葉がちりばめられている」と指摘している。また、作家の阿部達二も『狐釣り 信太郎人情始末帖』の解説において、作者の「最大の利器はやはり彼女が膨大な書物を渉猟して囊中にため込んで

---

<sup>19</sup> 伊原敏郎(1973)『歌舞伎年表 第六巻』岩波書店、p568



おいた江戸ことばだろう」<sup>20</sup>と称賛している。多くの江戸言葉の上に、登場人物のセリフを巧みに構成し、江戸の雰囲気をも漂わせることも重要である。たとえば、おぬいの伯父である久右衛門は、「ずるずるべったりというわけにはいかんだらう。色恋(いき)ごとは、けりが肝心だ」というセリフがある。久右衛門は、信太郎とおぬいの関係が長く続けられないと見込んでいる。その思いの上で、彼は二人の関係を「色恋(いき)ごと」と判断し、長続きより終わり方が重要だと信太郎に教える。このセリフは、久右衛門に目上の人としての威厳を反映させるだけではなく、芝居小屋で大札を務める人物の風流な一面も垣間見える。

確かに、歴史の細部まで再現する描き方は、この作品の最も優れているところといえる。前節で論じた、登場人物の視点に沿って江戸を描く方法も、細かい考証があってこそ成立する。その上、この節において、筆者はさらに注目すべきところがあることを示したい。それは、作品にある江戸像の全体性である。「信太郎人情始末帖」シリーズは町人の生活を中心としているが、実際に江戸社会の身分と職業を網羅したともいえる。作者の身分社会を総合的に表現する視座が読み取れる。

江戸時代の身分制度というと、「士農工商」の四つの階層が広く知られている。しかし、「士農工商」の区分に属さない身分も多く存在していた。作品の中で最初に登場したのは、まさにそのはみ出し者の集団である。前述のとおり、主人公信太郎はストーリーの前半で芝居小屋の一員として登場し、歌舞伎劇場の人々の生活を見つめている。河原崎座の大夫元と劇作者の河竹黙阿弥のほか、坂東しゅうかや市川小團次などの歌舞伎役者も描かれている。しかし、芝居小屋の人々は華やかな一面を持つ一方、身分上は社会の最下層に位置付けられていた。歴史学者吉田伸之は、江戸時代の芸能と身分社会について以下のように指摘している。

---

<sup>20</sup> 杉本章子(2005)『狐釣り 信太郎人情始末帖』文藝春秋、p293

芸能における十八世紀の位置づけは難しいが、幕府や藩の権力にとって、能などをのぞくと歌舞伎を始めとする芸能者の大半は遊民の一種と観念され、雑種賤民に準じて賤視の対象とされた。というのは芸能者が形ある財を生産せず、一方で支配階級が独占すべき文化の質を、部分的にはあはれ、異なる位相で達成しかねなかったからである。<sup>21</sup>

農業で支えていた封建社会の中で、生産をしなくても利益を得られる商人階層は身分制の下層に置かれた。さらに、有形の商品すら持たない芸能者は、商人よりも軽蔑されていた。また、作品にはもう一つのエンターテインメントの中心、吉原も描かれている。信太郎の恋人おぬいは、まさに吉原の引手茶屋・千歳屋の女主人に設定された。彼女が登場する部分には、吉原の生活を反映する描写が多くある。たとえば、第二回「屋根舟のなか」におぬいは、「昨年あたりから吉原も不景気で、角町(すみちょう)の万字屋では『花魁大安売り』という広告(ひきふだ)を江戸中に配ったほどなのだ」と話した。衰退している江戸の様子が窺える。また、第七回「ほうき星の夜」に、黒船が起こした騒動の中で、吉原は「商売差し止め」をおこなった。「仲之町は花魁に取って代わって、大八車が道中しているありさまだ」という。吉原は、遊女屋をはじめとして、関連する営業者が集住する特殊な同職集住の町と定義されている<sup>22</sup>。引手茶屋も吉原を構成する一部である。そのため、引手茶屋の性質は茶屋商売というより、遊郭の一部のほうが妥当であろう。その上、引手茶屋は芸能と同じく、実在の商品よりサービスを提供する。商人階層と分類されることもできないのだろう。作品の中で、信太郎の姉おふじが、おぬいを「愛敬商売が骨の髄まで染みこんでいなさるおひと」と軽蔑したシーンも描かれている。

<sup>21</sup> 吉田伸之(2002)『成熟する江戸』講談社、p149-150

<sup>22</sup> 塚田孝(1992)『身分制社会と市民社会—近世日本の社会と法—』柏書房、p115

身分の枠に属しながら、社会の下層で生活している人物も登場する。それは浅草今戸町の万平店に住んでいる小職人たちである。信太郎は勘当されてから万平店に移住し、彼らと「近所合壁」の関係になった。その職人たちは、狭い長屋で暮らしており、毎日自ら奔走しなければならない。それでも、収入が少なく、安定でもない。研ぎ屋の平六は主に吉原を回って商売をするが、黒船が現れてから吉原が休業し、「商売もあがった」という。その後、「幕府はにわか品川浦沖に砲台を築きはじめた」ことで、彼は「日傭(ひよう)二百五十文の稼ぎにありついて」いる。

ストーリーが後半に入ると、信太郎は美濃屋を継ぎ、大商人の一員になる。美濃屋は、日本橋「本町四丁目に店をかまえる大身代の呉服太物店」であり、信太郎の父で五代目になっている。『日本歴史地名大系』によると、江戸時代の本町地域は主に商人を居住させた地域である。一丁目から四丁目まで、様々な店が軒を連ねて、江戸の最も繁盛する商業地を形成したという。つまり、信太郎の家庭は、今でいうと大都市の中心部で店をかまえるほどの商人である。その上、奉公人も多い。店頭の商売を仕切る番頭一人と、手代頭一人と平手代数人、さらに丁稚たちも数人いる。ほかには、奥の屋敷で主人家族の面倒を見る女中たちも描かれている。具体的な人数は明言されていないが、奉公人だけで何十人にも達することが推算できる。以上の記述から、代々の努力で成り立った大店のイメージが容易に浮かび上がる。美濃屋のほか、信太郎の姉・おふじが嫁いだ大店、木綿問屋・嶋屋の様子も描かれている。信太郎と婚約を結んだおすずの実家も同業者の槌屋である。江戸社会における大商人集団の連結が垣間見える。

信太郎と対比的に、彼の幼馴染・元吉の家庭は小商人として設定される。元吉の家も本町四丁目だが、表側の大店と違って裏通りにある。彼の母はそこで小さい荒物屋を営んでいる。家の一階は店として商品を並べ、二階は梯子でつなぎ寝室としている。信太郎が住んでいた長屋より快適で

はあるが、大店の裕福さと比べるとかなり質素な構造である。

武士階層は物語の中心ではないが、彼らに関する描写は少なくない。特に、信太郎の友人・貞五郎を扱った回に集中している。貞五郎は、もともと「屋敷のある九十俵三人扶持の御家人磯貝」家の次男である。ただし、彼の家は身分社会の中で高い地位にある一方、「貧乏御家人」と呼ばれているほど貧しい。そのため、彼は芝居小屋で囃子方を務めている。ストーリーの後半では、彼の兄が急死し、彼は家を継ぐことになり、再び武士の身分に戻る。しかも、幕府の徒目付<sup>23</sup>という職にも就いた。その後、貞五郎は兄の死の真相を求めて奔走し、犯人の正体を突き止めた。

以上にあげた例のほか、料理屋、医者、芸者など、異なる職業や身分の人物が多く登場する。このように、作者は様々な人物像を通じて、江戸社会の全体的な様相を作り出した。その上、作品の中で各階層の関連性も表現されている。江戸の人々は身分制度で分化された一方、連結する一面も持っている。特に幕末期になると、各身分の境界線が曖昧になった。吉田伸之は文庫本『きずな 信太郎人情始末帖』の解説でこの点について論じている。

江戸の都市社会は、武家地、寺社地、町人地などとその空間が身分ごとに区分されると同時に、町人地を中心に、多様な身分や職分が展開して社会的にも分節化される構造を持った。その中で、人々は生まれながらの身分に拘束されながら、自らの職業に応じて、家、仲間、組合などの団体に属してその人生を生きた。またそこでは、將軍家を頂点とする武士身分が、支配者として武力や政治を代わることなく独占するが、武

---

<sup>23</sup> 江戸幕府の職名。目付の支配に属し、江戸城内の宿直、大名登城のとき玄関の取り締まり、評定所、伝奏屋敷、紅葉山および遠国への出役、ならびに幕府諸役人の公務執行状況の内偵にあたり、裁判、検使、拷問、刑罰の執行にも立ち会った。百俵、五人扶持。約60人。(引用)

士身分の中・下層部分にあつては、被支配身分である町人（または百姓）たちと、少なくとも都市生活の面で、身分の境界や差異は、部分的にはあるがかなり曖昧なものとなってゆく。本シリーズに描かれる近世後期から幕末期にかけては、御家人の身分が株として売り買いされたり、学問や文化活動の点で、身分を超える交流が見られたりというように、身分社会の有り様は相当程度流動するに至っているのである。<sup>24</sup>

引用文が言及した身分の流動は、作品の中でも明白に描かれている。たとえば、河原崎座の作者部屋には「御家人くずれあり、元坊主あり、信太郎のような勘当者あり」といわれ、様々な身分が合流したようである。また、最終的に武士の身分を放棄して庶民になった貞五郎と、収入のために職人の身分を放棄して日雇になった平六の例もあげられる。ほかには、第二回「屋根舟のなか」において、「一家揃って芝居に狂い」の旗本が歌舞伎役者を招き、屋敷で歌舞伎の指導を受ける場面がある。これはまさに身分を超える文化活動である。

以上で論じたように、作者はただ歴史の細部にこだわるだけではなく、江戸社会の状況を全体的に把握している。身分も職業も異なる多くの登場人物を描くことによって、江戸社会の様相がより全面的に反映されている。この描き方は、作品に反映している江戸像のリアリティとも繋がっている。同時に、作者の江戸社会に対する認識の深さもよくわかる。

## おわりに

本稿では、「信太郎人情始末帖」シリーズを中心に、杉本章子の作品における舞台背景としての江戸の様相を分析した。多くの評論が指摘している

---

<sup>24</sup> 杉本章子 (2007) 『きずな 信太郎人情始末帖』文藝春秋、p312-313

ように、このシリーズに見られる大きな特徴は、リアリティを帯びた江戸社会の造形である。本稿において、筆者は二つの項目に分けて、そのリアリティを作り出した方法を論じた。その一つの方法は、常に登場人物の視点に沿って舞台背景を表現することである。作品は三人称を使いながらも、一人称の小説と同じように、登場人物の目線に準じて町の風景を描いている。同時に、登場人物の感情表現を舞台背景に塗り込んでいる。このように、読者は登場人物と同じ視線で江戸の様子を見るだけではなく、彼らの心境まで感じられる。従って、江戸という舞台背景の臨場感がより強くなっている。もう一つは、作者の江戸社会の全体に対する把握である。本稿は、従来の評価に指摘されている緻密な歴史考証より、作品で表現している江戸社会の全面性に力点を置き論じた。作品において、江戸の職業を網羅しているといえる。その上、作者の身分社会に関する深い洞察も読み取れる。様々な人物像から、江戸社会の様相を全面的に表現している。人物の視点に従って展開している風景は、読者に江戸社会の雰囲気を実感させる。また、多くの登場人物によって、江戸社会の様相はさらに充実する。この二つの方法を通じて、作品におけるリアリティを持つ江戸像が完成した。舞台背景としての江戸像を分析した上で、作品が表している人情の様相を今後の課題としたい。また、小説にある江戸社会の様相と日本現代社会の関連性についても解明したい。